第598号 平成7年3月20日発行(毎月20日発行)
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

マカルー東稜に挑む（第4報）いよいよ出発

登山隊長・重廣恒夫

ＪＡＣの旗を囲む藤平総隊長と先発隊のメンバー、２月15日成田で

会員の皆様や各大学山岳部員の応援をいただき、梱包作業は昨年十二月十八日に予定どおり終了しました。

お陰様で、主要隊荷(約八・八トン)は、一月十七日船便でカルカッタに向け出航。その後、隊荷はインド亜大陸を縦断し、カトマンズを経て、二月末に現地到着の予定です。また、偵察隊用の隊荷（約一・五トン）は二月七日、アナカンで発送しました。

梱包作業においては「ヒマラヤの環境保護」「テイクイン・テイクアウト」を基本理念として、九四〇〇キログラムの荷物から六五〇キログラムの包装材を取り除き、現地で生じるゴミを大幅に削減しました。このような努力は、ヒマラヤを目指す登山者の本来の姿勢といえるでしょう。

一月十六日、第八回実行委員会で、隊の編成及び出発日を決定しました。

二月十五日、藤平総隊長、重廣登山隊長、ほか四名が北京に向け出発。三月一日、ネパールルートの先発隊、田辺隊員ほか三名、三月八日、本隊として渡辺隊員ほか五名がカトマンズに向け、それぞれ出発します。

一月十九日の理事会で、次の二名の隊員の承認、決定をしました。

○隊付医師・志賀尚子（日本医大付属病院・高度救命救急センター勤務）

○マネージャー・田久和義隆（南京中医学院学生）

そして一月二十八日、西蔵登山協会主席・洛桑達瓦氏、中国登山協会副主席・王鳳桐、同常務委員張江援の各氏が来日の際、東京で打ち合わせ、確認の結果、今回の登山隊連絡官として張江援氏を内定。

また、雪崩事故に対処するためのテレマウス（電波発信機）とその受信機

1995年（平成7年）
3月号（No.598）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目　次

マカルー東稜に挑む（第4報）…1
登山の成功を祈って・壮行会……2
報告
八方尾根スキー懇親会……3
河野幾雄さんを偲ぶ会……3
コンデ・リ登頂報告会……4
自然保護随想……4
東西南北
高野鷹蔵氏の書簡から(1)……5
骨投沢は「小繋ぎ沢」か……5
皇太子殿下と南アルプスの村…6
８５年前の手紙……7
支部だより……8
秋田　山梨　福岡
海外の山……9
図書紹介……10
『屋久島』『レクイエム小林基子さん』『HOLD THE HEIGHTS』『周辺的登山学・山のエッセイ』
山と医療……11
書籍受入報告・新入会員……11
会務報告……12
創立90周年記念事業募金応募状況・ルーム日誌・阪神震災被災会員状況・会員異動……14
INFORMATION ……15

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日　10～20時
水・金曜日　13～20時
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

オルトボックスの使用法などを実践的に学び、事故防止対策にも万全を期しています。気象については、通信衛星のインテルサットを利用し、日本気象協会の協力を得て、情報の収集を行います。さらに、日本大学エベレスト登山隊も同時期に入山しているので、互いに情報交換など、協力体制を取ることで合意をみています。現地からの連絡は、前述のインテルサットで、電話及びファックス回線を確保しています。

最後になりましたが、皆様方のご支援により、出発の運びとなりましたこと、心よりお礼申し上げます。

マカルー登山隊一九九五壮行会

登山の成功を祈って盛大に開催

マカルー登山隊一九九五の壮行会は、去る二月八日、東京・池袋のホテル・メトロポリタン「富士の間」で招待者、会員二百四十余名を集めて、盛大に開催された。

登山隊は日本山岳会創立九十周年記念事業の一つとして派遣されるもので、世界第五位の高峰八四六三メートルのマカルーの東稜に挑む。この未踏の東稜は全長一三キロに及ぶ長大な尾根で、チベット側から取り付き、ポーラメソッドによって初登攀を目指す。二月十五日に先発隊、三月初旬に本隊が出発。登頂予定は子供の日の五月五日である。

壮行会は、午後六時半から中川武総務・集会理事の司会で始められた。冒頭、総隊長の藤平正夫会長は「登山こそはJACの使命、ナムチャに次いで今回はマカルーを企画。長大なルートで強力なパワーを要するが、皆様のご協力を得て成功させたい」と挨拶した。

ついで来賓の読売新聞社・島田公博運動部部長は「計画と準備は万全と思うが、前途には予期しない困難が待ちかまえている。勇気と叡智をもち、一致団結して成果を上げられると確信している。読売とJACは中国開放以来協調関係を維持しており、今回も当社から二名が同行、ペンとカメラで報道する。無事目的を果たされ、再びこのような会がもてることを念願している」

文部省の小林敬治体育局長は「世界で注目されている意義深いこの登山を、日ごろの鍛練と緊密なチームワークを発揮して成功されることを期待し、世界の登山界の発展に寄与してほしい」と述べられた。

壇上には宮城の銘酒「一の蔵」の大樽が置かれ、続いてのセレモニーは勇壮な鏡割り。日中友好協会理事長村岡久平氏、読売新聞島田公博氏、文部省小林敬治氏、文部省競技スポーツ課長笠原一也氏、日山協会長斉藤一男氏、そして隊長重廣恒夫氏の六氏が壇上に立ち、中川理事のヨイショ、ヨイショの掛け声で一斉に槌がふりおろされた。乾杯の音頭はJAC元会長、マナスルのサミッター・今西壽雄氏が行った。

しばし懇談のあと、重廣隊長が「すでに登山界の〝壁〟の時代は終わり、〝長大なルートの時代〟がやってきた。そのチャンスに遭遇できたことを嬉しく思う」と挨拶して、隊員紹介を行った。各隊員の登山に対する決意は

渡辺雄二隊員「四十歳という年齢に負けず頑張りたい」

田辺治隊員「ヒマラヤ登山は十三回目、経験を生かし、成功に努力したい」

山本篤隊員「JACでは四回目、頂上を踏むのは自分！」

松原尚之隊員「南極以来二年振りの遠征。勉強させてもらうことと、何としても頂上に立ちたいという気持ち」

谷川太郎隊員「農大山岳部の栄光の名前をけがさないように頑張りたい」

小野岳隊員「大きな山なので、じっくり腰を据えてのぞみたい」

岡本憲隊員「食料係。勉強のつもり」

荒井俊彦隊員「装備を担当。経験は乏しいが、一生懸命やりたい」

竹内洋岳隊員「立正大学をこの遠征で留年。皆さんに教えていただいて」

田久和義隆マネージャー兼通訳「隊員の皆さんがつぶれた場合は私が登頂」

志賀尚子医師「救急が役目だが、その専門が生かされないことを祈る」

＊山本宗彦登攀隊長は仕事の都合で間に合わず、馬場博行隊員は欠席。

最後に重廣隊長は五月五日を登頂の日に予定しているが「どうか温かい目で見守ってほしい」と締めくくり、盛大な拍手を浴びた。隊員たちを囲んでの懇談、懇親の後、「阪神大震災の厳しい中での出発だが、頂上への夢を託し、皆様のご支援、ご協力を背中に登頂の夢を果たしたい」と感謝と決意のほどを披露して、八時三十分、散会となった。

（小倉　厚）

壮行会で壇上の隊員を紹介する重廣隊長

REPORT 報告 REPORT

八方尾根スキー懇親会
吹雪で唐松岳登山を断念

集会委員会

一月十四日から十六日まで、恒例の八方尾根スキー山行に家内共々参加させていただきました。私にとっては二回目の参加で、楽しみにしていたものです。昨年は晴天に恵まれ、多くの方々が唐松岳に登頂しましたが、私はスキー用具だけの装備でしたので、山頂には登れず悔しい思いをしました。今年は登頂するつもりで、気合いを入れ、フル装備で臨みました。

一月十四日は、雪が降り寒い日でした。昼頃、八方池山荘に荷物を置き、一休みした後、ゲレンデでスキーを楽しみました。四時頃山荘に戻ると、皆さん車座になって一杯（かなり）やっており、私も仲間に入れていただきました。

夕食後、懇親会に移り、東京、東北、関西方面からの参加者四十名で、一人ひとり自己紹介を行いました。私はこの懇親会が好きです。山での楽しみ方、知らない山の話等々、今まで私が抱いていた山に対する考え方は何と狭かったのだろうかと、つくづく考えさせられます。

一月十五日の明け方、山荘は強風できしみ、驚かされました。早朝、外は吹雪となり、皆外へ出て行こうかと迷っていました。とにかく悪天の中を思い切って山荘を後にし、やっと下のゲレンデにたどり着きました。運行を心配していたリフトも全て動き出し、昨日と同じく四時頃までスキー三昧となりました。

夜の懇親会は「おらが国の自慢の山」「日本百名山」のゲームを楽しみ、わいわいと夜の深まるのも忘れて愉快な時を過ごしました。

一月十六日最終日は、朝食後記念撮影をして解散。昨日と同じ天候の中をザックを背負い、滑走して下のゲレンデへ。何本か楽しんだ後、帰途につきました。

今回は天候に恵まれず、後立山連峰も一回も姿を現しませんでしたが、日本有数のビッグゲレンデで思い切り滑り、夜も酒を酌み交わしながら親交を深め、貴重な話に耳を傾け、充実した三日間でした。

また来年も、唐松岳登頂用のフル装備で参加させていただきたいと思います。家内は、ワンシーズン分滑ったみたいで楽しかったと、一週間たった今でも話しております。

最後に、いろいろ心配りしてくださった集会委員の方々、本当にありがとうございました。

（鳥居紹雄）

猛吹雪をついて下のゲレンデへ

忘年会を兼ねて
「河野幾雄さんを偲ぶ会」

三水会・土曜会

十二月十七日午後六時三十分から、JAC一〇四号室で表記の会が開かれた。長年にわたり、日本山岳会のクラブライフの要の一人であった河野幾雄会員が亡くなられたのは、平成六年の盛夏、八月七日の朝であった。その年の暮れ、故人ゆかりの土曜会と三水会の共催で、偲ぶ会が土曜会の忘年会に併せて持たれたのである。出席者三十四名。

会場奥のテーブルには遺影とお供えものが用意され、故人の日ごろの交遊を反映した多彩な顔ぶれの参加で、部屋は立席がでるほどの盛会となった。

開会に当たり、故人の弟である河野之保会員より、この日の会を開くに至る経過について挨拶があり、ついで三水会と土曜会をそれぞれ代表して高田会員と神谷会員の挨拶、織内名誉会員の発声で全員の献杯が行われた。

懇談に入り、用意された品々に、故人の奥様寄贈のウイスキーも加えられ、多彩なアルコールを舌の潤滑剤として、交遊の深い出席者諸氏の思い出話が次々に披露された。主に土曜会、三水会、木暮祭、赤シャツの会などを巡る

話題で、クラブライフに関わる貴重な時代の証言ともなっていた。そのほか、ある会員による「晩秋の一日、笹子峠の辺りで友人と二人で悠然として酒を嗜まれる河野さんに偶然お会いした」ときの体験談は、さりげなく自然体で山を楽しむ故人のその境地に、深い感銘を受けた。

また神谷会員は父君の遺稿と追悼の書「低山高蹤」の中の神谷恭小伝は河野幾雄さんが執筆された大変な力作であるとの推奨の上で、その貴重な一冊を持参され、寄贈対象者を決めるために抽選が行われるなど、会は大いに盛り上がった。

会も終りに近づいて、ご子息が挨拶に立たれ、故人について、父と子としての日常、また前年夏の、おそらくは最後になったと思われる家族同道の白馬岳大雪渓への山行などのお話があり、医者として、また登山者として我が道を一筋に歩んだ生涯であったことを強調された。

戒名は、故人には誠にふさわしい「碧空院山紫仰望居士」。

ご遺族のお二人は八時頃お帰りになったが、ほかの参加者たちはしばらく懇談を続け、九時頃までには散会した。

最後に訃に接して、詩心のある隣人により河野家に寄せられたという句を掲げて、この報告を終わる。

たまわりしいのちを生きて夏山へ

（古市　進）

イラスト・宇津木　慎一

にぎやかに

コンデ・リ峰登頂報告会

二火会

十二月十三日、日本山岳会のルームにおいて、還暦登山隊のコンデ・リ峰登頂報告会を開催した。三十八名の出席をみて、会場は熱気ムンムン。宮澤さんのエイト管の使い方の注意話？原田さん、そして久世さんのヒマラヤの花の説明など、楽しい話でいっぱいだった。

なお報告会終了後、一〇四号室で忘年会を行い、会員の手料理に舌鼓をうち、山行計画の話などで盛り上がった。

（有賀幸子）

自然保護随想

林道と山道

山口悠紀子

渋沢丘陵ハイキングから一年たった。午後に秦野文化会館で開く自然保護シンポジウムの、人集めをねらって計画した半日ハイクであった。百三十二人の団体は車道をぞろぞろ歩き、震生湖で休憩した。

車道の脇、まばらに落葉樹が生えた小山、浅間台で木漏れ日を浴びながら昼食をとった。コース中、唯一自然が残る場所であった。

シンポジウムは二百八十人の参加者を集めて開催された。半日ハイクが少しは貢献したかなと、いい気分だった。後半のフリートーキングで、冷水を浴びせられる。

「山岳会・自然保護委員会主催のハイキングで草地で休憩するとは何ごとだ。百人以上で草地を歩き、座って昼食をとるのは、自然破壊にほかならない」。短くまとめると、このような発言であった。「高山植物を踏んだわけでもないのに、おおげさな。草を踏むのがいけないならハイキングはできなくなる。利用しながら保全するのが世界の趨勢だ」と反論したかったが、残り時間も少なく、後の予定も迫っていたので、発言しなかった。

渋沢丘陵に下見に行き、昼食の場所を草地のピークと決めた三人で、一月の末に茨城の足尾山に登った。山頂近くまで林道が伸びている足尾山は、私たちのように里の村から山道を歩いて登る人は少ない。中央に祠がおかれ、裸地化した展望のよい山頂で昼食とした。

一本杉峠に向かう。八分くらいで舗装された車道に出てしまった。少し先で再び山道に入る。車道は東斜面をうねって遠回りだし、硬い舗装道路より、土の山道を歩きたかったから。春や秋は、どんな彩りをしているのか、想像しながら林間の踏み跡を楽しむ。

「草地の昼食を非難した人たちは、車道を歩けというのかしら？」

「自然を保護するためには、山道を歩かないほうがよい。だから、山へ行かないほうがよい？」

「山に行くから、自然の素晴らしさが理解され、ゴルフ場は目障りだし、山肌を削る林道に疑問を持ち、開発は最小限に、と思うのよ」

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五～七枚以内でお願いします）

カット　中村あや

高野鷹藏氏の書簡から(1)

望月達夫

高野鷹藏氏といえば本会創立発起人の一人であり、本会への功績は『山岳』六十年（一九六三）の追悼欄中、殊に武田久吉、藤島敏男氏の文章等で明らかである。なかでも明治四十二年から大正八年まで約十年間（同氏二十五歳から三十五歳まで）、本会の事務所を横浜のご自分の店で引き受けられたことが、何としても最大なことで、余裕ある境遇から、会のあらゆる面倒をみられた高野さんのような人がいたからこそ、会の成長が順調に行われたといっても過言ではない。

高野氏は封書、葉書ともにこの印を使用された

現在私の手許に残っている高野さんの書簡を数通掲げてみたい。最初のものは、私が偶々岡野金次郎氏の縁者であるのを知っておられたので（会報一七二号参照）、その死去（昭和三十三年二月十四日）に対しての悔やみ状である。

●昭和三十三年三月十二日・封書

拝啓　山岳会報が来て、岡野さんが不慮の死をとげられたとあり、何とも申上様がありません、深く哀悼の意を表します。交通事故とは残念な事です。

敬具

嵩（たかし）（注＝高野さんの息、当時私と同じ職場にいた・故人）については一方ならぬ御配慮に預り有り難く御礼申上ます、無力なる老父深く御礼申上ます。彼れの家も明十三日棟上げを致します。完了しましたら一度御出かけ下さい。（注＝阿佐ヶ谷の高野氏邸内の敷地に嵩君が自宅を新築したことを指す）

●昭和三十五年三月十七日・消印書留

封書に（原稿）と書かれ、手紙は添えられていないが、『山岳』五十五年所収の「茨木猪之吉君の追憶」の原稿であったと思われる。（同書一六八ページ参照）

●昭和三十五年五月二十日・封書

『山岳』拝受、御丹精の程有難く感銘の至りで御座います、往年『山岳』を小島君（注＝烏水）とやっていた頃、独逸オーストリア山岳会の会報を見て、ああした内容のものが出したいと、幾度か考へましたが、その頃の夢が今、見られるわけで御座います、嬉しい事です。

偖て突然ですが、最近の週刊朝日に小杉放庵氏の記事があり、ふと思いついた事は、同氏は『山岳』二年の表紙を畫いた事もあり（此れは城君［注＝数馬］が畫かせたと思いますが）その頃、小杉さんの先生の五百城（いおき）文哉氏は高山植物をよく畫いていました。それで城さんとも知り合いと思います。

五百城氏は山の絵はあったかどうか知りませんが、山岳会初期としては吾々山登り党に知られていたのですが、或意味では日本の登山界の先駆者？であったかも知れません、横浜や日光などで外人土産に売っていた「日本的水彩畫」家と云ふべきでしょうが、小杉さんあたりに此際五百城氏の事を『山岳』でも会報にでも書いてもらったら如何でしょう、私は昔は茨木（注＝猪之吉）を通じて小杉さんとは面識がありましたが、今は全く存じ上げていませんから、若し右につき何か御考へがありましたら山岳会の名で小杉さんに御交渉下さったらと存じますが、よけいな事ですが気づきましたままに申上げます。

不順の候愈々御健祥を祈ります。

敬具

五百城氏の高山植物の懸軸は美事なものでしたが、何処かに残っていますか？　美術的にはどうか存じませんが、丸山君（注＝晩霞）のものより写実的（標本的）でした。

（以上すべて杉並区阿佐ヶ谷五丁目二十八番地の高野氏から武蔵野市吉祥寺三一三七　望月宛）

なお余談ながら『山岳』初期数号に屢々出てくる「蝶郎」なる筆名は高野さんを指す。

（以下次号）

骨投沢は「小繋ぎ沢」か

佐藤一栄

会報五九四号で佐藤芝明氏は、越後銀山平の骨投沢は「猟師が枝折峠の尾根で獲物を解体し、毛皮や肉をとった残りを、山の神の使いである狼に投げ与えたものか、または昔の銀山平で働

いた人たちが死亡したとき、遺骨を故郷に送る途中でこの沢に投げ捨てたものか」と解釈された。

これに対して、同五九六号で、上越や会津地方の山に詳しい川崎精雄氏は、「魚沼駒ヶ岳骨投沢の由来」と題して「昭和五年に聴かれた話として、枝折峠の枝折大明神は霊験あらたかな神で、不潔なものを極端に嫌われたから、銀山平で亡くなった人の遺骨を持ってこの峠を通ることができず、みな銀山平に埋葬を余儀なくされた。ところが掟を破って遺骨を携え峠を越そうとした男が、頂近くにさしかかると、快晴だった空が真っ暗になり、暴風に変わって、男が抱いていた遺骨は北ノ又川に臨む沢に吹き落とされてしまった。銀山平で亡くなった人は、その地に葬る風習を今も守っている」と書いておられる。

昭和四十五年に地元の湯之谷村役場が発行した「越後国魚沼郡藪神庄、湯之谷郷」という銀山平の歴史をまとめた書物には、銀山稼業が盛んであった明歴から元禄年間にかけては、年間に一万数千人の人々が枝折峠を越えたとあり、峠の「一服場」として口留番所の坂本から半分石、仙台櫃、日本坂など標高差九〇〇メートルの峠道に十九か所も休み場の地名が記されている。銀山側九合目の台地に名付けられた問屋場には「問屋と季節女郎部屋ありき、骨投沢は眼下に望める」と書かれている。鉱山が賑わった頃、肉親知友の遺骨を持って下山すると称して、銀の密移出が企てられたので、取り締まりの方便として、「銀山平から一片の骨でも持ち出して峠越えをすると、山神の怒りをかって天候急変し、為に身命危うく、持参した骨を沢に投げたら天候は回復して、身の安泰を保った」と言い触らしたのが、骨投沢命名の由来とされている。

これらの話を伝説として聞く分にはなるほどと頷けるが、私考を述べると、こつなげは小繋ぎの転化で、道中の宿場や休憩地を指したものであろう。すなわち問屋場は問屋とか妓楼が繁盛した峠道の中継地で「小繋ぎ」とも称され、その脚下に見える沢を「小繋ぎ沢」と呼んだのが訛ったものと思われる。

越後の新発田藩が参勤交代で通った会津街道の、諏訪峠手前に綱木集落や綱木川があり、岩船郡を流れる荒川の支流沼川の枝沢に小綱木川もある。藩政時代に宿駅を「継立場」とも称したのが、つなぎ場、つなぎと略されたものであろう。

寛永年間の国境争い文書に「志織峠（枝折峠）の岩屋に大明神があり、赤之川（阿賀野川）の端に波尾神（波拝）が祀られ云々」と書かれているように、語音が似ておれば、当て字を用いることにこだわらなかったらしい。

こう書いてくると興醒めのようではあるが、骨投沢という呼び名はやはり寂しすぎて、瀬音さわやかな清流にはふさわしくない。せめて銀山平や越後駒ヶ岳を訪れる人たちには「小繋ぎ沢」と覚えていただきたい。

皇太子殿下と南アルプスの村『芦安村誌』

田畑真一

平成六年一月、五か年の歳月をかけて芦安村（山梨県中巨摩郡）の『芦安村誌』が完成した。市町村誌初の登山史項目「南アルプスの登山史」（拙稿）を含む村誌であり、ウエストンの登山事跡なども網羅している。

この村誌について、先に皇太子殿下には親しくご関心の及ぶところとなり、ご嘉納の栄を賜った。同年十一月、芦安村村長・望月義清氏が袱紗に包んだ村誌を携えて宮内庁へ参上、関係の儀を終えたところである。ちなみに市町村誌にあって、皇族からのご嘉納については前例を聞いたことがない。献上ではない。あくまでも殿下からのお声がかりによるものである。時代が時代であれば「皇太子殿下賜御嘉納栄」というところであろう。私は拙蔵する昭和八年発行、加賀爪鳳南の署名入り本『鳳凰山』に「李王垠殿下賜御嘉納栄」の朱印があることを思い出した。

さて、殿下がこの村誌のことをどんな経緯によってお知りになったものか。お伺いする術もなければ私なりに考えを巡らせるものである。それは村誌が完成後、いち早く村から日本山岳会へ寄贈があり、本誌「山」五九二号（同年九月号）の図書紹介欄には「第十三編に南アルプスの登山史が記述されているが……」などの記事が載った。殿下はこの記事をご覧になられたのでは、と考える。ちなみに殿下の芦安村へのご来村について調べてみると、次のとおりである。

年月	方面
昭和五十一年四月	夜叉神峠、杖立峠へご登頂
昭和六十二年八月	北岳へご登頂
平成二年七月	駒ヶ岳から仙水峠北沢峠などをへて仙丈岳へご登頂
平成五年十月	三度にわたるご来村とご成婚をお祝いし、広河原に記念碑を建立

つまり、殿下にあらせられては、思い出深い南アルプスの村・芦安村である。であればこそ、ご関心を深められ

た。いかがなものであろうか。

望月村長に聞いたところ、同年秋の園遊会においても、殿下から親しく村誌についてのお話があったとのことである。

［別記］本稿をまとめるにあたり、薬袋東洋男氏（東洋インターフェイス社長）、細井澄子氏（図書委員）のご配慮を得た。記して謝意を表します。

八十五年前の手紙
―四松庵における新年晩餐会の感激を綴る―

南川金一

本誌五八七号と五九五号に開発秀三氏が明治四十三年一月十六日開催の四松庵での新年晩餐会における寄せ書きについて記していた。奇しくもというべきか、タイミングよくというべきか、この四松庵の集まりに出席した人がその感激を記した八十五年前の手紙がこのほど見つかった。当時の本会の雰囲気を伝える資料と思われるので紹介してみたい。

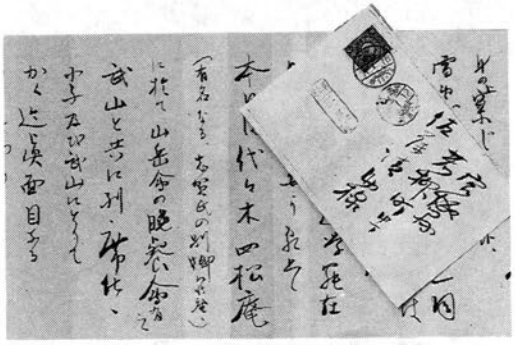
この手紙は、本会秋田支部の伊藤康二会員が入手したもので、筆者は昨年訪秋の際にその実物を拝見するとともにコピーをいただいたので、その手紙の周辺の事情を古い『山岳』などで調べていたのだが、忙しさに紛れて報告が遅くなってしまった。

手紙の主は当時慶応の学生であった成澤武雄氏（明治四十二年七月入会、会員番号二一三）で、友人の武山良次氏（明治四十年入会、会員番号一一四）とともに晩餐会に出席して多大な感銘を受け、その感激を宮城県若柳町在住の父親（佐藤清助氏。成澤武雄氏は在学中は成澤姓を名乗り、卒業して宮城県に帰って再び佐藤姓になっている）に書き送ったものである。

手紙の全文の紹介は控えるが、「東京は寒気一通ならず厳しく候へば」の時候の挨拶につづいて、

「本日は代々木四松庵（有名な志賀氏別邸に御座候）に於て山岳会の晩餐会有之、武山と共に列席仕り候。小子及び武山にとりて、かく迄真面目なる、かく迄心おきなく、かく迄研究的なる、かく迄上品なる、かく迄平等なる、かく迄名士混較の会合は御座なく、実に此一夕の清談、会合、かるい病気は治る程の心地致され候。遠く雪を踏むでほぼ会する者三十余名、酒井子爵を筆頭に、半ばは天下の名士に御座候…」

と会合の模様を記し、当日配られた雑誌と新聞、寄せ書きをぜひ父親にも見せたいとして、志賀重昂はじめ小島烏水、田山花袋、柳田国男ら十一名の署名者を紹介している。末尾には「一月十六日夜十時」とあり、代々木での会合から芝桜川町の下宿に戻って直ちにその感銘を父親にしたためたことが窺える。



晩餐会の感激を綴った成澤武雄氏の手紙

四松庵での会合の模様は、『山岳』第五年第一号に詳しい報告があり（同第八十一年の「年次晩餐会あれこれ」に織内信彦氏がその一部を紹介している）、出席者の名前も記されているが、開発氏が紹介しているように錚々たる顔ぶれが名を連ねている。手紙は、その席に参加した入会間もない一学生が、出席者の多彩さに加えて、山を巡る真摯な研究・豊富な話題、それでいて堅苦しさを感じさせず、何ら分け隔てなく同等の仲間として遇せられたことへの感動を述べたもので、発足間もない頃の本会の気風や雰囲気を伝える好個の資料と思われる。

成澤氏については、『山岳』第四年第三号「会員登山報」欄に「会員武山良次氏は友人成澤氏と共に不二に第三回登山を試み…大野川より乗鞍に登り、湯川を下って白骨温泉に出で、槍ヶ岳より烏帽子までの縦走に成功し…」とあり、この時のことであろうか、四松庵の会合の記事が載っている同第五年第一号の辻村伊助「飛騨山脈の縦走」中に、嘉門次の案内を得て成澤、武山、川島三氏、冠兄弟と上高地から槍に向かったとの記述がある。武山氏については、『山岳』第六十四年に当時の編集者であった望月現名誉会員のご苦労により追悼文が残っているが、成澤氏については昭和十七年の会員名簿の記載を最後としてその後の消息は分からない。

なお、伊藤康二氏の手元には、他に四松庵晩餐会の次第・メニュー、同晩餐会の案内状、第四回大会の案内状および入場券、会費の請求状および領収証などがある。これらの資料から解明される事柄は少なくないと思われる。本会の百年史のためにも貴重な資料となろう。

なお、手紙の中の一部判読が難しい部分について松永敏郎会員からご教示をいただいた。

JAC 支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況をリポートします。

秋田支部

台湾・南湖大山登山報告

一昨年の春に実施した韓国岳人との友好登山・秋田太平山と駒ヶ岳も無事終わり、一段落した昨年の夏「小さな海外登山―今後の計画」と題して、近隣国の名山を数座選び出し、支部会員に紹介してみた。

結果は、台湾の大覇尖山が圧倒的に多く、実施時期を天候の安定と運賃格安の十一月中旬と決め、旧知の友人・元台湾山岳協会理事の林照雄氏の協力を得て、早々と実施の段階となった。

しかし、間近になって山頂直下の鉄梯子が老朽化で撤去されたとのことで、女性の参加を考え、急遽、台湾五岳山の一つで最もコースの長い南湖大山（三七四二メートル）に変更し、予定どおり一行十一名、十一月十二日に成田を出発した。

山中での四日間は快晴に恵まれ、三日目にして登頂。雄大な眺めの山頂でご来光、そして、雪山山脈に映える影南湖を拝むことができた。

この山頂に地元太平山の記念石を安置し、協力くださった淡水鎮体育会や台中県健行登山会のメンバーとともに無事登頂を喜び合い、さらなる友情を深めあった。

周辺の峰々全七座を登って同コースを戻り、下山後、もう一つの目標でもある台湾・太平山で最も高い雪山山系の太平山（三二〇〇メートル）に向かったが、森林遊楽区としての観光地であり、山頂部は檜の茂るヤブ山で登山価値はなし。それでも数名でやぶこぎし、山頂の一角を踏んだ。中腹のお寺にも地元太平山の記念石を奉納して登山を終了した。

なお、余録の有名観光地をも巡り、最後は陽明山国家公園を案内していただいた。帰りの便が故障で一日延期となり、二十一日に無事帰国した。

最後に、協力くださった林氏をはじめ、台湾の岳人に心から厚くお礼申し上げます。（佐々木民秀）

南湖大山、感激の頂上で秋田支部のメンバー

山梨支部

木暮理太郎翁碑前懇親会の報告と予告

第三十二回碑前懇親会は、一九九四年五月二十八日～二十九日、山梨県須玉町営「リーゼンヒュッテ」で開かれた。集まる者四十三名。

木暮先生没後五十年、謦咳に接した方は、参加者中、川崎精雄さんただ一人。亡くなられた昭和十九年十一月に開かれた追悼会のことなど、五十年前の秘話を披露された。今年も堀口丈夫会員のイワナの骨酒は大好評であった。

翌朝は快晴。車を連ね、金山平の木暮碑前に至り、碑前祭を行う。ついで、信州峠から林道を西進、女山とのコルで車を捨てる。横尾山の北面を直登して山頂に登り、八ヶ岳、南アルプスや金峰山を間近に眺めて乾杯。

往路をもどり、タラノメ、ウドなどを採り、車にて黒森へ。町営温泉で山の汗を流し、記念山行を終わる。来年の再会を約して流れ解散となった。

●第三十三回の木暮祭は左記のとおり。

日時　五月二十七日(土)　十七時から懇親会。二十八日(日)朝、碑前祭のあと瑞牆山荘下の金山峠から、魔子（一七〇〇メートル）―三本木（一六六一メートル、三等三角点）を往復。車にて、木賊峠、観音峠を経て敷島町営温泉志麻の湯に入って、流れ解散。

場所　山梨県北巨摩郡須玉町金山平有井館（Tel〇五五一―四五―〇四五五）

交通　JR中央線韮崎駅下車、山梨交通・増富ラジウム温泉行きバス終点下車、徒歩九十分（タクシーあり）

費用　一万一千円（一泊二食、飲みもの、記念品、帰路甲府までの交

通費など）

申込　五月十五日までに〒四〇〇甲府市武田三―六―二七　山村正光　Tel〇五五二―五一―三一七五

主催　日本山岳会山梨支部　〒四〇〇甲府市青沼三―二―一四　エンドウ内　Tel〇五五二―三三―〇六六六　Fax〇五五二―二四―五二六五

福岡支部

お知らせします

●支部役員が交替

事務局長・盧周孝（一一五八七）

〒七五〇下関市西神田町七番五号

Tel〇八三二―二二―六九七一

Fax〇八三二―三四―一三六九

自然保護委員・野元禮次（一一七五六）

〒八〇七北九州市八幡西区則松氏田六八九

Tel〇九三―六〇二―三七五五

●屋久島自然観察登山

本誌二月号掲載の屋久島自然観察登山のお知らせの項に左記を追加します。

講師・屋久町立屋久杉自然館々長　日下田紀三氏

【各支部事務局に振り込み用紙五枚、本部に二十枚送付しています。不足の場合は、問合せ先に請求してください】

海外の山

ブレディゲイト

江本嘉伸

サガルマータ（エベレスト）の登攀史で気にかかっていた出来事についての興味ある報告が『CLIMBING』誌最新号（一九九五年二月一日～三月十五日号）に出ていた。

ニュージーランドの登山家、リディア・ブレディのエベレスト登頂に関しての、登山家グレグ・チャイルドの記述である。

一九八八年十月十四日、ブレディ（当時二十七歳だった）は、サウスコルから単独で登頂した、と表明して世間を驚かせた。それも無酸素だった、という。女性ではまだ一人も無酸素登頂をなしとげた者はいなかったから、衝撃的だった。

しかし、問題があった。彼女の属するニュージーランド隊の許可ルートは南西壁（スロバキア人との合同で許可を取った）であって、南東稜の許可は得ていなかったのだ。

ブレディ自身、カトマンズにおりた時はネパール観光省に「写真を撮っているうちに高い所まで行き過ぎた。実際に頂上にまでいったかどうか分からない」との報告を出している。登頂をめぐる混乱には本人の責任もあった。

今回グレグ・チャイルドの質問に対してブレディはあらためて、自分は登頂した、と明快に答えている。

その日、十月十四日午前二時、サウスコルのキャンプを出発したブレディは、午後四時半から五時半の間に頂上に立った。時計をなくしてしまったため、正確な時間はわからない。カメラもシャッターが凍りついて使えなかった、という。

ブレディの行動は、隊からすれば、全く自分勝手な、許しがたいものだったようだ。ボブ・ホール隊長以下他のメンバーは、ブレディが登頂したその日には、ベースキャンプを引き払って下山してしまった。

「何か起きても、彼女の責任だ」ブレディが救助を必要としたらどうするか、と尋ねたアメリカ人登山家にホールは、こう答えている。

カトマンズでネパール観光省に出した文章の中でホールは、「彼女がひどい状態だった、というスペイン隊の報告からしても、私はブレディが登頂したとは信じていない」と書いた。隊の責任者として、メンバーが許可なしに登った場合、ネパール・ヒマラヤへの立ち入りは当分禁止されてしまうかもしれない、との危惧もあったのだろう。

エドモンド・ヒラリーの栄光後、ついに自国から初の女性登頂者が出たらしい、というのに、ニュージーランドの新聞も、ブレディの登頂を疑問視する論調が多かった。この問題には〝ブレディゲイト〟という呼び名までついた。

ブレディは、頂上をめざす途中、そして下山の途中、ジェロニモ・ロペスらスペイン隊の一行と出会っている。「ブレディは疲労困憊して、這うように歩いていた」などのスペイン人の当時の〝証言が〟彼女に不利に働いた。

今回、グレグ・チャイルドはそのロペスとのインタビューも紹介している。「南峰で出会った時の状態はそんなにひどくはなかった。彼女は這ってなんかいなかった。彼女が頂上に登らなかったのなら、あんなに長い時間何をしていたんだ？」と、ロペスは答えている。

今、物理療法の学校に通っているブレディは、間もなく、ヒマラヤに戻るつもりだ、と言っている。爽やかな壮挙とは言いにくいが、エベレスト登頂者リストにブレディの名は残ることになりそうだ。

図書紹介

カット　中村あや

『屋久島』森・水・山（写真集）

日下田紀三・著

屋久島の写真集はこれまでに数多く出版されているが、ほとんどは、たんなる美しいとか、素晴らしい風景の紹介だ。

だが、この本は少々違う。ユネスコの世界遺産に登録された一九九三年の発刊にもかかわらず、登録記念ムードはない。屋久島の自然の、とてつもない時間空間を通しての、偉大な営みそのものを正面に据えながら、豊かだが、厳しいその自然とともに暮らす人々の姿を尊重する視点が光る。心のこもったコメントとの相乗効果はサブタイトルどおりの「森・水・山」であり、新鮮なモンタージュだ。したがって鹿児島大学田川教授らの解説も不可欠な要素となっている。　著者は栃木県益子の出身だが、NHKのカメラマンを十八年間勤めた後、屋久島に移住した。屋久島についての著作は四冊目である。著者の屋久島への深く優しい想いが昇華して本になったようだ。

一九九三年七月　八重岳書房発行
一一一ページ　四千三百円

（川合　周）

『レクイエム　小林基子さん』

山ぼうしの会・編

朝日カルチャーセンター立川において、山登り教室のサブリーダーであった小林基子さんの追悼集である。

六十一歳、病魔に倒れた基子さんへの思慕の情を、受講生の有志二十一人が、短文ながら、具体的に熱っぽく綴っている。特別寄稿として、本会の宮下啓三氏が、彼女をめぐる縁の糸の数々を披露。宮下氏が愛煙家となったきっかけは、農鳥の石室で出会った基子さんにあるとの秘話などが出てくる。

本書後半に、基子さんの若いときの文章も若干載せている。敗戦の年の秋、通学途上に見た雪の北岳が、彼女の登山の原点となったことなど。山の文学、音楽、草花を愛してやまなかった基子さんを彷彿とさせる瀟洒な感じの追悼集である。

一九九四年十月発行　A5変型
一二四ページ　非売品　残部僅少
問い合せ〒一九一　日野市南平一－二三－八　小笠原かず子　℡〇四二五－九二－六八七三　（山村正光）

WALT UNSWORTH HOLD THE HEIGHTS

The Foundations of Mountaineering
The Mountaineers (Seattle 刊) 1994

アルプスが登られはじめた頃からエベレストが初登頂された時代までの世界の山岳登攀史である。古き英国登山クラブの実績、先駆者の登山、岩登り時代、スタミナ登山からスポーツ登山へ移行する過程がその時代の社会現象とともに述べられている。

英・独・伊のエベレスト、ナンガパルバット、K2への執着や世界各地の登山を分析する一方、北米にはロッキーやアラスカを中心に、ヨーロッパのアルピニズム黄金時代の業績とは全く違った登山史があることを強調している。登山史上に名を残した多くの欧州人の活躍にまじって槇有恒氏のアルプス、カナダ、田口二郎氏のアルプスの実績も記され、ウエストン氏の指導のもとわが日本山岳会が設立された点にもふれている。

四三二ページ　二九・九五米ドル

（南井英弘）

『周辺的登山学・山のエッセイ』

小倉　厚・著

山旅を続けて五十年目を一つの区切りとして、本会会員の小倉厚さんが、「新ハイキング」「深田クラブ会報」「山と渓谷」などに掲載した文章をまとめて、表題の本を上梓した。出版にあたり〝間接的に登山を楽しみ安全登山を考えたり、日本の山岳に連なるもろもろの知識を、知らず知らずのうちに身につけるエッセイ的な読み物を〟というねらいで執筆を心がけたという。

第一章・共通、一般論では山と服装に始まり、山での失敗談などを、第二章・北海道から、第六章・四国、九州の百名山随想、百名山賛歌と続き、第七章・海外にまで及ぶ。随所に、著者の山、人、人生（観）を垣間見る。まことに山の周辺をめぐる楽しいエッセイ（登山学）であり、続、続々編を期待したい一書である。

一九九四年十月刊　近代文藝社　二五〇ページ　千八百円　（細井澄子）

■山研がオープンします■

●平成七年度の上高地山岳研究所は四月三十日開所、その日から宿泊業務を行います。申し込みは
●四月三十日(日)～五月七日(日)まで東京の日本山岳会山研係へ官製はがきで
●五月八日(月)からは直接山研へ電話で（℡〇二六三－九五－二五三三　管理人＝内田二葉さん）

山と医療・大野秀樹

高所登山には ビタミンEの服用を

活性酸素は、炎症、虚血障害、発癌、糖尿病など種々の疾患に関与しているのみならず、最近、老化を促進する因子として関心が高まっている。

運動も活性酸素の産出を増大し、骨格筋のほか、心筋や肝臓に損傷や炎症を生じるなど、生体に様々な負の影響を及ぼす。さらに、5100メートルの高度に2週間以上滞在しているヒトの呼気中ペンタンが上昇し、活性酸素の増加が示唆されている。低酸素状態にもかかわらず、活性酸素が増加するメカニズムはまだよく解明されていないが、尿酸（痛風の原因物質）を生成する過程の酵素（キサンチンデヒドロゲナーゼ）の変換が一つの原因ではないか、と推定されている。筆者らは、ラットを½気圧（約5500メートルの高度に相当）で飼育し、肝臓の活性酸素が増加し、抗酸化能力が劇的に低下することを観察した。

登山は、運動と低圧低酸素負荷の相乗状態であり、いっそう活性酸素の発生が高まり、その害が増強すると予想される。すなわち、近年流行の高所トレーニングは、酸化的ストレスの影響を考慮しないと逆効果になることがある。紙幅の関係で詳細は省略するが、ここでは、長期間の高所登山を行う場合、積極的な抗酸化剤（とくにビタミンE，Cとβ－カロチンの抗酸化ビタミン）の服用を強く推奨したい。ビタミンEの効果は、すでに実証されている。

書籍受入報告（1995年1月）

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
日本登山医学研究会(編)	エベレストの麓での医療活動（1993－1994年の記録）	36pp／26cm	日本登山医学研究会	1994	発行者寄贈
白川義員	南極大陸（白川義員作品集）下巻：永遠の時空	171pp／43cm	小学館	1994	著者寄贈
紫蘭会（編著）	ＡＣＣ紫蘭会　モロッコ・アトラス山行　1994	55pp／27cm	紫蘭会	1994	発行者寄贈
田畑真一	ウェストンの信濃路探訪：山々への賛歌	239pp／20cm	センチュリー	1994	出版社寄贈
浅野孝一	知的登山のススメ：山を読んで書く楽しみ (Yama Books No. 23)	239pp／20cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
浅野孝一	低山逍遙の真髄：低い山を歩く心と実際 (Yama Books No. 26)	205pp／18cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
岡野敏之（編）	ナムチャバルワ初登頂（写真集）	149pp／30cm	読売新聞社	1994	購入
白籏史朗	世界の名峰・花巡礼（白籏史朗写真集）	95pp／30cm	新日本出版社	1995	出版社寄贈
Sandford, R. W. 他（編）	Canadian Summits : TheCanadian Alpine Journal 1907－94	189pp／23x31cm	Alpine Club of CANADA	1994	編者寄贈

会務報告

一月定例理事会

日時　一月十九日㈭　十八時三十五分～二十時三十分

場所　日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、中村副会長、小倉、大倉、村井、山口、片岡、南川、松浦、伊藤、水野、南井、堀井、渡邊、溝口、中川、山本、大谷各理事、中島、川崎各監事、西村、宮下、神崎、重廣各常任評議員

【委任】鳴原副会長、大森理事、斎藤、湯浅各常任評議員

議事

【審議事項】

一、「白頭山写真展」（岩橋崇至会員）の名義後援について　小倉

平成七年二月十七日～二十二日有楽町朝日ギャラリーの「白頭山の四季」写真展の後援要請。　承認

二、登山隊の名義後援について　小倉

一橋大学「カカルボラジ峰登山隊一九九五／一九九六」ミャンマー北部カカルボラジ峰五八八一メートルの登山に対し、一橋大学山岳会から要請。　承認

三、海外登山基金助成について　村井

一月十八日海外登山基金委員会を開催。申し込みは十一隊、審議の結果、本年度の助成対象を次の三隊とする。

①一九九五西蔵・日本友好GⅡ峰登山隊　五十万円

山岳同人B・S・R　パキスタン・カラコルムヒマラヤ

②日本山岳会マカルー登山隊一九九五　百万円　㈳日本山岳会　マカルー峰（八四六三メートル）東稜

③日本大学エベレスト登山隊一九九五　五十万円

日本大学桜門山岳会　チョモランマ峰北東稜

四、九四年九月返還の百万円　大倉

今回は一般会計に入れ、来期より返還金が出た場合には、海外登山基金繰り入れとする。　承認

五、入会金・年会費改定　大倉

財務委員会を平成六年九月八日、七年一月九日に開催し、検討した結果次のとおり改定案を提案する。

(1)改定理由

現行会費は昭和六十二年度に改定したものだが、職員の増員、事務所の拡充、通信費などの上昇にともない一般管理費、事業費が増加。現行会費据え置きでは会の財政が不安なので、収入増を計るため会費の値上げを計ることにした。入会金についても増額し、基本財産に繰り入れ、基本財産の備蓄を計る。なお、若年会員の入会を促進するため、満二十五歳までの入会者に限り入会金を免除する。

(2)改定事項

①入会金および年会費を左記のとおり改める。

・入会金一万五千円→二万円

・個人または団体の年会費を在住地にかかわらず一万二千円に改める。

・ただし、婚姻関係にある者が共に通常会員に限り、申し出により、いずれか一名の年会費を減額し、在住地にかかわらず八千円とする。

②終身会費を左記のとおり改める。

・入会後十年以上在籍する者二十五万円→三十万円に

・入会後二十年以上在籍する者十八万円→二十二万円に

・入会後三十年以上在籍する者十二万円→十五万円に

・四十年以上在籍するもの五万円→六万円に

それぞれ改める。

(3)改定時期

平成八年四月一日より適用

＊支部助成金（現、支部還元金）千五百円→二千五百円に

二月理事会にて継続審議する。

六、ナムチャバルワ写真集　村井

マカルー・九十周年募金用として、四十八冊の使用を要請。　承認

七、マカルー峰登山隊、隊員追加承認について　重廣

二名を隊員として追加決定したい。

・田久和義隆（三十二歳）通訳　英・中国語、無線技術

・志賀尚子（二十九歳）医師　脳外科　日本医科大学　承認

●マカルー登山隊支援トレッキング

先年のナムチャバルワ初登頂の際にも実施したが、今回も登頂予定のゴールデンウィークに支援隊を組織したい。予定ではマカルーとチョモランマ東壁の好展望台であるランマ峠まで入る。

日時　一九九五年四月二十二日㈯～五月七日㈰　十六日間

主催　㈳日本山岳会マカルー登山隊

旅行主催・アトラストレック旅行社

「山」二月号に掲載し、募集する。

●登山隊準備行動経過について　重廣

隊荷＝十二月十八日梱包完了　一月神戸港出港　三月初旬カトマンズ

行動経過＝富士山合宿、入山予定計画などを報告。

出発予定＝二月十五日㈬偵察隊　三月一日㈬先発隊　三月八日本隊出発。　承認

【報告事項】

一、マカルー・九十周年募金について　小倉

一月九日㈪、経団連より二千万円の企業募金割り当て表を取得。一月十七日現在会員募金＝応募会員五百五十三

名、千六百五十三口、八百二十六万六千円。企業募金＝七社、百九万円。

＊二月八日㈬壮行会を実施するが、その前段で募金委員会を開催したい。

二、青年登山懇談会について　大谷

期日＝二月二十五日㈯～二十六日㈰

於・水道橋グリーンホテル

日程＝二十五㈯午後一時～五時、この四時間をどう進めるか、昨年の反省と各年代ごとの会員の受けとめ方、若い会員を集めての講演会・トークショーなど、内容について担当理事を中心に検討中である。二十六日には事務局担当者会議を実施する。

三、日本大学エベレスト登山隊　神崎

このたびは本隊に海外登山基金よりの助成金交付に対し、感謝申し上げます。JACのマカルー登山とほぼ同時進行となるが、両峰の距離が約二十キロである。ノア衛星の使用などにより相互通信連絡が可能であると考えられるので、共同利用をすすめたい。なお、二月十四日㈫九段南の日本大学会館二階にて午後六時より壮行会を開催するので、JAC役員の方々は招待状が届きましたらご協力願います。

四、一月十七日の阪神大震災に対して　藤平会長

関西支部会員で被害をうけた方々に対し、お見舞いの電報を出す。

【新入会員】

大西保他十二名。

【委員会報告】

●総務委員会　二月二十五日㈯青少年登山対策～青登懇　於水道橋グリーンホテル　二十六日㈰全国支部事務局担当者会議　三月十八日㈯オリエンテーション　於ルーム。

●集会委員会　一月十四日～十六日八方尾根スキー懇親会は四十三名参加、三日間吹雪であった。二月八日㈬マカルー登山隊一九五壮行会　於ホテルメトロポリタン

●青年部・遭難対策委員会　一月十一日㈬「遭難対策とレスキューを考える」を開催。講師・北田紘一氏（日山協）、斎藤義孝氏（労山）、橋本利治氏（都岳連）。十二月二十日㈫都岳連・海外委員会との交流忘年会。一月十七日㈫第二回青年登山懇談会打ち合わせ。

●自然保護専門委員会　①十二月十日第二十四回山の自然学講座を行い、受講者六名が実践活動報告。②木曽駒ヶ岳気象観測のため頂上直下に設置した観測機器が、十二月十八日すでに破損していることがわかった。③入会した受講者が、より活発に活動するために「山の自然学クラブ」を作る動きがある。体制改革にも効果を期待できるので推進サポートする。④講座参加者中の優秀者七名に「山の自然学解説者（日本山岳会）」のカードを、できれば会長名か常務理事名で出し、活発化に役立てたい。

●図書委員会　「第二十六回山岳図書を語る夕べ」が次の要領で開催される。三月七日午後六時三十分より　日本山岳会集会室　演題「島田巽さん、山の心」講師・近藤信行氏。

●資料委員会　①故・広瀬潔名誉会員の遺族から寄贈を受けた「レルヒ大佐」当時の『古代スキー（ツングース族使用）』一台を、予定どおり一月二十七日、新潟県上越市スキー発祥資料館へ寄託した。②鳥取県・伯耆国山岳美術館（館長・吉川明男会員）から、JAC所蔵の絵画展を本年四月～六月にわたって開くため、二十点ほど貸し出し希望の要請があった。現在の東京所蔵は十八点（まちまちの絵画）なので、先方が上京打ち合わせ後、処理したい。

●フィルムビデオ委員会　二月十七日㈮、集会室にて映画会開催予定。

●青年部　二月一日青年部例会　ギャジ・カン峰報告会、講師・田辺治氏（信州大学山岳部OB）。

一月臨時理事会

日時　一月二十日㈮　十八時五十分～二十一時四十分

場所　日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、中村副会長、小倉、大森、村井、山口、片岡、南川、松浦、伊藤、南井、堀井、溝口、中川、大谷各理事、中島監事、宮下、西村各常任評議員

【委任】鴫原副会長、大倉、水野、渡邊、山本各理事、川崎監事、斎藤、湯浅、神崎、重廣各常任評議員

議題

一、日本山岳会組織見直し案について

藤平会長より、組織見直しの提案理由について説明の後、討議に入る。

会員

・会員の急激な増加には否定的である。

・入会資格の問題点として、質の維持、向上を望む。

・紹介者の認識について。

・セコンダーの有資格者の範囲。

委員会・委員

・統合については、各委員会の性格上で相違がある。

・委員については、任期と定数。

ワーキング・グループへの対応

などの議論が交わされた。

二、二月の理事会までに、中村副会長がまとめたものを各理事に事前に送付。総括的討議を行うこととして散会。

＊

■訃報　辰沼広吉名誉会員

二月十二日午後十時三十四分、膀胱がんのため、東京都千代田区の病院で死去、七十九歳。葬儀・告別式は十六日、日本橋西河岸地蔵で執り行われました。ご冥福を祈ります。

創立90周年記念事業募金応募状況

（1995年2月7日現在）

標記の募金のご協力をお願いしたところ，多数の方々からの応募をいただきました。
会報にご芳名を掲載してお礼に替えさせていただきます。（敬称略）
累計 630名／1923.2口／9,616,000円

●20口（100,000円）
宮下秀樹　今西壽雄　明治大学炉辺会

●10口（50,000円）
坂倉登喜子　中村純二　神崎忠男　東京農業大学山岳会　中島寛　松田雄一　飯野亨

●8口（40,000円）
田中弘美

●6口（30,000円）
山口俊輔・延子　古市進　中村義　金子浩　南井英弘　平山善吉　穴田雪江　鴫原一男

●5口（25,000円）
酒井敏明　菊地文雄

●4口（20,000円）
魚本定良　牧野良三　上尾庄一郎　松永敏郎　遠藤登　吉川鴨一　小林碧　高橋妙子　森修作　西沢健一　佐伯尚幸

●3口（15,000円）
山崎大造

●2口（10,000円）
小山睦子　川井耿子　紫蘭会　棟方亮　松本元　関根和男　江上清治　坂本眞生　三宅健治郎　多須川浩　五十嵐篤雄　坂井八郎　鈴木昭　鳥橋祥子　望月阿香実　新井信太郎　継松久美男　原田勉　中村智彦　菊池洋　荒木浩二　會田宣明　早川瑠離子　山口次繿　近藤晋　織田沢美知子・孝全　中野明　中島道郎　中島信一　大里祐一　太田敬　田中洋子　大和田卓　三輪利雄　牛木素吉郎　渡辺誠司　松島静吾　小椋凱夫　飯野俊介　吉田光吉　遠藤昭治　横山隆　森恵子　奥原廣次　佐藤芳久　田邉卓司　高見和成　紀伊輝彦　高野笑美　石井貞吉　高辻謙輔　石塚克美　渡辺勝彦　秀島敏　大関保　中山昇二　三枝礼子　黒石恒　田中聡　牧野衛　仲田道彦　遠藤光男　勝俣岩男　田川芳子　稲葉十四男　加納巌

●1口（5,000円）
武内敏男　小野寺正英　田中節子　和田庄司　広瀬一隆　飛田彰　石田要久　阿部恒夫　前嶋信　鍬守篤磨　武田敏　田立泰彦

ルーム日誌

1月

6日　フォトビデオクラブ　自然保護専門委員会
9日　アルパインスキークラブ　図書委員会　財務委員会
10日　二火会　アルパインスケッチクラブ
11日　青年部　データバンク委員会
12日　自然保護専門委員会　学生部
17日　連絡委員会　自然保護専門委員会　山研委員会
18日　三水会　海外登山基金委員会
19日　理事会　青年部　学生部
20日　臨時理事会
21日　自然保護専門委員会
23日　総務委員会　遭難対策委員会　資料委員会
24日　フィルムビデオ委員会　アルパインスキークラブ
25日　科学研究委員会
26日　青年部　学生部　自然保護専門委員会
27日　海外連絡委員会　データバンク委員会
30日　集会委員会　資料委員会
31日　指導委員会　自然保護専門委員会

1月来室者575名

■阪神震災被災会員状況（一月末現在）●田中邦彦（三四一三）隣家がもたれかかっている●徳永篤司（三八九八）病院内滞在●前田武治（四〇四一）家屋半壊●山本光二（四二三三）家屋半壊●阪上秀太郎（四二七一）六甲アイランド滞在●住吉仙也（四六七五）家屋半壊●岡田博司（四九二〇）大阪滞在●高田誠（四九五〇）家屋半壊●宗實二郎（六〇九五）宗實慶子（五〇〇八）家屋半壊、大阪滞在●桑田結（五二六二）会社全壊●明石貴雄（五八一九）家屋半壊●森廸彦（六五一二）家屋半壊●南川博茂（八五四三）家屋半壊●若山洋子（九〇九七）家屋全壊、足骨折●三品武彦（九二八一）家屋半壊●上原泰行（九二八三）家屋倒壊●足立勤（九三七三）家屋半壊●佐野源一（九六一二）家屋半壊●近藤ゆか（一一六六四）家屋半壊●原田勉（一一八七二）家屋半壊

関西支部・水谷会員の調査結果報告。

■会員異動

▼物故　大西雄一（六六二四）6・10・1　石間信夫（四六六六）7・1・7　鴫原啓佑（四一八六）7・1・21月　原俊二（一四三六）7・1・24　**▼退会**　秋保一郎（一〇七二二）7・1・10　丸山猛（九三七五）7・1・15　関口昭（九三九三）7・1・15豊田三千代（八〇九六）7・1・31　**▼改姓**　門井照子（八二一四）→長谷川照子

INFORMATION

◆第十五回日本登山医学シンポジウム

医療委員会

日時　六月九日(金)～十日(土)
場所　神奈川県葉山町「湘南国際村センター」
内容・一般演題＝要望演題（低体温症）
・招請講演＝①ジョン・サットン先生「オペレーションエベレストⅡについて」②エフゲニー・ギッペンレイター先生「ロシアにおける高所医学の歴史と現況」
・特別講演＝原眞先生「低圧訓練からヒマラヤへ」
・シンポジウム＝「高校生・大学生の部活動における高山病」
・パネルディスカッション＝「女性と高所登山」
問合せ　事務局・神奈川県大和保健所　堀井昌子（TEL〇四六二―六一―二九四八　Fax〇四六二―六一―七一二九）

◆創立九十周年記念東北ブロック行事

岩手支部

東北地区では六支部協議の結果、盛岡で記念行事を開催します。
○式典・記念講演・祝宴
日時　九月九日(土)　十三時～十八時三十分
会場　盛岡市・ホテル東日本
講師　マカルー登山隊長・重廣恒夫氏
会費　九千円
○記念山行
日時　九月十日(日)　八時～十六時
場所　姫神山（一一二三・八メートル）
費用　三千円
参加申込　所定の申込用紙（郵便振替用紙に印刷）による費用の払い込みにより受け付けます。七月三十一日(月)締切り。
＊記念山行は登り口と下山口が異なるため、マイカーの使用はできません。
＊記念講演のみの参加はご遠慮下さい。
＊要項と申込用紙は四月中に東北各支部にまとめて発送します。直送希望の方は後記まで、四月以降に葉書でお願いします。
宿泊ホテルの確保は各自で。電話番号を要項に記載します。
連絡先（電話でなく郵送で願います）〒〇二〇―〇一盛岡市西青山三―三一―一三　日本山岳会岩手支部長・中谷充宛

◆第六回赤シャツの集い

土曜会

中高年会員のための懇親山行を桜の季節に計画しました。赤シャツ着用歓迎、もちろん若い方も大歓迎です。
日時　四月二十二日(土)～二十三日(日)
宿泊　四尾連湖・水明荘
費用　約九千円（宿泊及びバス代）
集合　身延線市川本町駅前　四月二十二日　十四時三十分
コース　新宿駅―甲府乗り換え―市川本町駅―バス―四尾連湖（泊）―蛭ヶ岳（または付近散策）―バス―市川本町駅―新宿駅
係　坂倉登喜子　河野之保　石崎晴一郎　内藤勇
申込　四月十五日までに葉書で〒一五〇渋谷区恵比寿二―一四―五　内藤勇宛　TEL〇三―三四四一―四八〇一

◆第十九回若葉会山行・予告

集会委員会

毎年恒例の若葉会山行を行います。詳細は四月号に掲載します。
日時　六月十日(土)～十一日(日)
場所　粟ヶ岳及び守門岳

◆ヒマラヤの植樹・教育・医療支援

ボランティア隊員募集

カラコルム山脈のバルトロ氷河下流域最奥のアスコーレ村（三〇〇〇メートル）から氷河舌端のバイユ（三五〇〇メートル）まで往復します。植樹、村民教育、医療、土木、農業、編みもの指導など、支援活動を行います。
A班　四月二十一日～五月十四日
B班　七月二十一日～八月十三日
費用　約三十五万円（料金別途でナンガパルバット山麓などのトレッキングができます）
連絡先　〒五二〇大津市北大路三―一五―七　ヒマラヤン・グリーン・クラブ事務局　遠藤京子　TEL〇七七五―三四―〇九一一　Fax〇七七五―三四―〇九八四
＊希望者には、93年、94年報告書セットを送料込み千円でお送りします。

◆第二十回「中部博之山の絵」展

日時　三月二十八日(火)～四月二日(日)　十一時～十九時（日曜は十六時三十分まで）
場所　大阪市・心斎橋フジギャラリー（大丸南角　東へ三軒目）
問合せ　TEL〇六―二五二―二四〇〇

日本山岳会会報　山　598号
1995年（平成7年）3月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町5―4　サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261―4433
振替口座　東京3―4829
発行者　藤平正夫
編集人　伊藤　敞
印　刷　株式会社　双陽社